

「この人を見よ！」

創世記 8 章 1 節—22 節

私達は神様が最初の人、アダムを創造し、その後、エバを創造され、二人は人類最初の夫婦になったということを見てまいりました。しかし、その彼らは禁じられていた実を食べ、園を追われて出ていきました。彼らの長男カインは弟のアベルを殺害し、カインもまた地の放浪者としてさまよい出ていきます。以後人間は増え広がり、その人の様について創世記 6 章は「時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた」（創世記 6 章 11 節）と記し、その様をつぶさに見ておられた神様はある決断をします。

5 主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。6 主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、7 「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる」と言われた。8 しかし、ノアは主の前に恵みを得た。9 ノアの系図は次のとおりである。ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。ノアは神とともに歩んだ（創世記 6 章 5 節—9 節）

そうです、そこで神はこの地を一度、大洪水によりリセットします。しかし、その洪水により全ての人間が失われることがないように、神と共に歩んだノアに恵みを与え、大洪水から免れるようにと彼に箱舟を作るようにと示されます。ノアは家族と共に箱舟を造り、彼らはその洪水を免れ、洪水がひいた後に大地に定住し始めます。しかし、そこで収穫し、生産したブドウ酒に彼はしたたか酔い、醜態をあらわし、そのことにより彼の息子とその子孫が祝福を失ってしまったということ为先週はお話ししました。

神が最初に天地を創造された時、この地球環境には秩序がありました。秩序とはこの世界に存在しているものが偶然の産物であり、互いにてんでばらばらであるということではなく、全ての被造物の背後にある知性がこの世界にあるものに関連性を与え、それぞれの存在には意味があり、それらが互いに補い合うように成り立っているということです。宇宙の天体について、また地球の自然をとりあげ

たドキュメンタリー番組が映し出す、その神秘的な美しさに私達は驚嘆しますが、それは私達がその背後にある神が定められた秩序に驚いていると言っても過言ではないでしょう。その秩序がありますゆえに、この宇宙も地球環境も保たれてきたのです。しかし、現在この地球環境の秩序が混乱し（宇宙にまで人間が生み出したごみがただよっているといいます）、これまでなかったような色々な自然災害が起きています。そして、その要因には人間が大きく関わっています。大気汚染、海洋汚染、森林伐採にしても人間がこの秩序を乱し、それを破壊へと推し進めている張本人なのです。

これら私達を取り囲む宇宙や自然環境のみならず、同じように私達、人間の互いの関係にも本来、秩序がありました。そう、アダムとエバが禁じられた実を食べる前まではその秩序があったのですが、彼らがその実を食べた時からこの秩序も失われました。この「秩序」とは「人間が歩むべき道」と言ってもいいでしょう。聖書はこの人の歩むべき道を示している書物です。しかし、私達は今日、その言葉に目もくれずに、私達を取り巻く自然環境と同じように、私達の互いの関係にも混乱をもたらしています。

ですから創世記に記されているように『時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた』（創世記 6 章 11 節）という世界、また『人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりである』というのは、人間が互いにあるべき秩序を乱し、それがまさしく極限に達していたということを意味するのでありましょう。

この国にとりましてとても大切な選挙が今週もたれます。その日にいたるまでの日々、国民はこの国のあり方とか、この国の未来について健徳的で活発な議論をする機会が与えられていました。それぞれの候補者がもつ国に対するビジョン、その政策というものが論じられ、私達はこの国について考え、決断し、それぞれの票を投じるべきです。しかし、この度の選挙に関していえば、それら以外の事ばかりが注目されていたように見受けられます。

太古の時代には腕力がある人間がその腕っぶりにより人の間に君臨し、その集団なり地域をまとめあげていたと思われます。その後、その力は財力や、軍力と私たちを変え、長い時を経て、近年になり私達の国は民主主義というものに行きつきました。国民がそれぞれ一票の投票権をもち、自分達のリーダーを決めるのです。この選挙のために人は知恵を出しあって、そのために必要な法律を作り、

色々な経験を積みながら、そのかたちを作り上げてきました。しかし、私達はその民主主義の本懐である選挙において、この度、その理想とはほど遠い様をあらわにしてしまったように私には見受けられました。多くの人はこの度の二人の候補者について色々なことを言いますが、その二人をここまで選んできたのは私達国民なのです。このことは民主主義が始まった当初の、まだ手探りの時代の話ではなくて、その研究がなされ、それなりの歴史を経、その道の第一線にいると自負しているこのアメリカで今、起きていることなのです。人とはいったい何者なのでしょうか。

今日、目を世界に向ければ、いいえ、私達のすぐ身近なところで誰かが自分の財産や命を脅かされています。そのことにより指名手配され、逃亡している人の顔写真を私達は目にすることがあります。この国においても、他国においても獄に人が溢れ、もはやそのスペースがないというようなことを聞きます。そう、彼らは自らがしてしまったことにより、逮捕され、裁判にかけられ、そして服役しているのです。

彼らの言動は法律の文言にひっかかったのです。しかしながらそんな人達に対して、誰かに言った言葉や示した態度により、人の心を引き裂いておきながら、獄に囚われることなく暮らしている者も無数にいます。そう、その人達は法の文言にひっかかることはありません。しかし、実際のところ鉄格子の向こうにいる人と、これらの人たちの違いは一体、何なのでしょう。私達は人間というもの、そう、人である自分自身というものについて見つめ、そこから考えていかないとなりません。

私は映画をよく見ます。牧師という仕事からでしょうか、SF とかファンタジーというような非現実的な映画よりも、私達の身近にある人間模様がふんだんに織り込まれた映画を好みます。もちろん、映画にも良しあしがありますので、見ようと思わない映画のほうが圧倒的に多いのです。そんな観ようとは思わない映画の一つに数年前に上映された「Purge」という映画があります。なぜこの映画を観ようと思わないかと言いますと、その話の内容はある程度、想像できるからです。そう、その中には目をそむけるようなバイオレンスがたくさんあるということが最初から分かっているからです。

なぜ、まだ観ていないのに、その映画にはたくさんのバイオレンスがあると分かるのでしょうか。その映画は経済が崩壊した後のアメリカを舞台としています。

そして、そのアメリカが一年に一度、全ての犯罪が合法される夜を設けたのです。夜の七時から翌朝の七時までの間、全ての警察、消防、医療が停止されるのです。そうです、その12時間、この国から法律がなくなるというストーリーなのです。そのような12時間に置かれた世界というものを想像する時にこの映画がどんな場面で埋め尽くされていくかということを想像するのはたやすいことです。

もし、今、このアメリカでそのような法律が一晩、施行されたらどうなるのだろうかと思いますと背筋が凍りませんか。法治国家に住んでいて、その国の治安体制が整い、賄賂や買収が少なくともオープンではできない国に住んでいるということは大きな恵みです（世界全体を見ますと、このような国の方が少ないのかもかもしれません）。法がなく、治安を取りしめる体制がないとどうなるかというと、まさしくこのようなノアの時代の人になりかねないというのが私達、人間なのです。その罪の性質を持ち合わせながら、かろうじて法律により抑制されている国に住んでいるゆえに、ある程度の治安が保たれているというのが私達の現状なのです。

これは特別選んだわけでもない、最近、一週間に起きたサンディエゴの犯罪地図です。ここには誰かの車の窓を割ったり、道すがらの人が強盗にあったり、家に泥棒が入ったり、多くはありませんが時々、殺人というようなことが起きたことが記されています。この地図は法治国家アメリカで私達の一週間の間に今、起きていることです。それではもし、この国からその法がなくなったらどうなるでしょうか。おそらく私達はこの地図のストリートが見えないほどに埋め尽くされた諸々の犯罪を目の当たりにすることでしょう。

まさしく、このルールなき世界のことを大洪水の前の世界は言い表しているのです。そう、この状況を思います時に、創世記に記されているように『時に世は神の前に乱れて、暴虐が地に満ちた』（創世記6章11節）という世界、また『人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりである』という世界を私達は理解できるのです。

そして、神様はその世界を一掃し、新しい出発をするわけですが、時がそれほど経たないうちに今度は「バベルの塔」という問題が起きます。その経緯はこのようなものです。

1 全地は同じ発音、同じ言葉であった。2 時に人々は東に移り、シナルの地に平野を得て、そこに住んだ。3 彼らは互に言った、「さあ、れんがを造って、よく焼こう」。こうして彼らは石の代りに、れんがを得、しっくい代りに、アスファルトを得た。4 彼らはまた言った、「さあ、町と塔とを建てて、その頂を天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて、全地のおもてに散るのを免れよう」。5 時に主は下って、人の子たちの建てる町と塔とを見て、6 言われた、「民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた。彼らがしようとする事は、もはや何事もとどめ得ないであろう。7 さあ、われわれは下って行って、そこで彼らの言葉を乱し、互に言葉が通じないようにしよう」。8 こうして主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らは町を建てるのをやめた。9 これによってその町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を乱されたからである。主はそこから彼らを全地のおもてに散らされた（創世記 11 章 1 節-9 節）。

今、私達の周りには色々な言語がありますが、その昔、全地は同じ発音、同じ言葉でした。全地が同じ発音、同じ言葉であった時、人々は何をし始めたのでしょうか。彼らはれんがを焼き、町と塔を建てて、その頂を天にまで届かせ、我々の名前をあげようではないかと動き出したのです。この様を見た神様は言われたのです「民は一つで、みな同じ言葉である。彼らはすでにこの事をしはじめた」（6）。

ノアの洪水により人類は新しく始まりました。ノアは神の前に正しく生きようとした人です。彼は完璧な人間ではありませんでしたが、神の前に生きようとした彼とその家族から人類は再出発したのですから希望もあります。しかし、先週、お話ししましたようにそのノアの息子達の心には既に深い闇があり、そこからまた増え広がった人間達がこのバベルの塔の建築にたずさわったのです。

そんな人間を見て、神様は言われたのです『彼らは既にこのことをし始めた』。この言葉はとても意味深です。この言葉は神様が遅かれ早かれ、人はこのことを始めるだろうという思いがあったことを示しているからです。そう、人の性（さが）は遅かれ早かれ、自分が神のようになるというあの当初のアダムとエバの思いにとらわれ、実際にそのことを具体的にし始めるということを神様は知っていました。そして、そのことが早くも始まったということを神様はここで言われているのです。

ここに記されていますように人はこの後、言葉が乱されて、世界各地に散らされました。以降、同じ言語をもつ者達があちこちに集まり共に暮らし始めたのでしょう。そこに集落が誕生し、民族が形成され、それがやがて国となっていったのでしょう。何を隠そう、私達の祖先もその中の誰かに行きつくのです。

神様はノアの洪水の後に『わたしはこの度、したように、もう二度と、すべての生きたものを滅ぼさない』（創世記8章21節）と言われたようにこの度は彼らを滅ぼすことはありませんでした。しかし、彼らの言葉を互いに通じなくさせたのです。それは彼らの語る言葉が互いに異なる言語となり、ゆえに互いに何かを共にすることができる状態ではなくなったということでありましょう。そして、同時にこの出来事には、たとえ互いに同じ言葉を語っていたとしても、もはや彼らは互いに理解しあえる、協力し合える、心通じ合うようなことがさらに困難になったというようなことも含まれていたことでしょう。

確かに言葉が異なる者同士のコミュニケーションは大変です。でも、それは何も異なる言語の者達の間の問題だけではなく、たとえ同じ言葉を話す者同士でも言葉が通わないのです。私が言っておりますこと、皆さんよくお判りでしょう。同じ日本語を話しているということはイコール、心と心が通じ合うということではないのです

今、創世記の主な出来事を駆け足で見えておりますが、さあ、それではこのような人間がここから先に進むために、次に不可欠となるものは何でしょうか。そうです、先ほどから触れています、この無法の人間にはルールが必要となるということです。人は何でもかんでも自分の好き勝手に、本能のおもくままに生きてはいけないということを互いに強いるために律法が必要とされました。ゆえに神様は創世記が終わり、出エジプト記の時代となり、モーセを通して人に十戒をはじめとする律法を与えます。もし人がその律法の中にとどまるのなら、少なくとも人間の秩序は保たれるのです。このために私達人間を代表するかのように、この律法に従い生きるために神様が選ばれたのがイスラエルの民、すなわちユダヤ人でありました。しかし「もし人がその律法の中にとどまるのなら」というのが曲者で、結論から言いますと彼らはその律法の中にとどまることなどできず、ことごとくその律法を破り、生きてきた、それが旧約聖書の歴史なのです。このようなことを繰り返し、まさしく詮方尽きてしまったというユダヤ人の姿のまま旧約聖書は閉じられていくのです。このユダヤ人の挫折と敗北は何も彼らに限ったこと

ではなく、それが仮に別の民族でありまして、その律法を守り通すことはできないのです。そう、それはユダヤ人の問題ではなく、人間の問題だからです。

そして、その時から完全に行き詰ってしまった400年の時が経ち、今から2000年前に一人の人がエルサレムにおいて総督ピラトの前に立っていました。ピラトはローマから送られてきてエルサレムの治安維持に取り組んでいた総督で、彼は全く世俗的な人間であり、聖書の神というものには何ら心を寄せていないローマの役人です。その時のことについてヨハネはこう記録しています。

『1 そこでピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。2 兵卒たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、3 それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつけた。4 するとピラトは、また出て行ってユダヤ人たちに言った、「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。5 イエスはいばらの冠をかぶり、紫の上着を着たままで外へ出られると、ピラトは彼らに言った、「見よ、この人だ」。6 祭司長たちや下役どもはイエスを見ると、叫んで「十字架につけよ、十字架につけよ」と言った。ピラトは彼らに言った、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」。7 ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」(ヨハネ19章1節－7節)。

そう、ピラトの前に立っていたのはイエス・キリストでした。その時、イエス様はユダヤ人に訴えられ、彼らはイエス様を十字架の死罪にしようとしていたのです。この箇所を読みますと、イエス様はムチで打たれていたということが分かります。この時代、十字架刑の前になされたムチ打ちのムチには鉛や動物の骨がつけられており、それが背中に当たるたびに、背中の皮は引き裂かれ、時にはその骨までも露出するほどの衝撃だったと言われます。そして、その頭には茨で作られた冠がかぶせられ、紫の上着を着せられました。言うまでもなく冠は王を意味するもので、紫も王が身にまとう色で、これらには明らかにイエスへの侮辱がこめられていました。兵卒たちは血まみれになったイエスを「ユダヤ人の王、万歳」と馬鹿にし、平手でその頬を打ち続けたとここには書かれています。

ピラトはこのイエスを、茨の冠、紫の上着をつけたままユダヤ人の前に連れ出して、とんでもないことを群衆に向かい言ったのです。そう、「この人を見よ！」と。

私達は今日、ここまでノアの時代、バベルの時代の人間をみてまいりました。その姿は決して誇れるような人間の姿ではありませんでした。先ほど触れましたように神様がノアの箱舟の後、二度とこの地を滅ぼさないとされたその直前、神様はこんな言葉も言われていました『人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである』（創世記 8 章 21 節）。そう、この言葉が事実であるのなら、私達は人として神の前に出れるような者ではないのです。

しかし、折しもイエス・キリストのことを何も知らない異教徒のピラトはイエス・キリストをユダヤの群衆の前に差し出していったのです、「この人を見よ」と。そう、その人は鞭打たれ、ぼろぼろとなったイエス・キリストでした。ピラトはそれ以前のイエス様との会話により、イエスには何の罪もないと思っていました。ただ異国人である彼には理解できないユダヤ人の間の何かしらの宗教的な理由によって、民衆はイエスに対して怒っているのだと思っていました。そんなピラトの第一の関心はユダヤ人の宗教的信条ではなく、彼が仕えているカイザルの逆鱗に触れることのないように無難に自分の仕事をする事で、このイエスをユダヤ民衆の前に立たせることにより、「この哀れな人を見よ。こんな人を あなたたちは王と思っているのか」と彼らの情に訴え、できることならこの事を大きな騒ぎにはしたくないという心がそこにはありました。この言葉はそんな彼の保身が込められたものだったのです。

しかし、これまでお話ししてきました聖書の中の人間の姿というものを目の当たりにしてきて暗澹たる思いでいる私達にとりまして、「この人を見よ！」と言われ、私達はその顔を上げてこのお方を見る時に、私達はそこにこれまでお話ししてきた人間とはまったく一線を画すお方をそこに見出すのです。

私達は最初に私達の世界の秩序が混乱しているということをお話ししました。私達の互いの関係が混乱しているとお話ししました。しかしこのイエス・キリストの言動を聖書の中に見ていくのなら、私達はイエス・キリストには神の秩序、すなわち私達と神との関係、また私達の互いの関係をもう一度、修復する力があるということに気がつかされるのです。イエス様自ら「わたしは道である」と言われたように、このキリストのうちに我々が歩むべき道があるということに私達は気がつかされるのです。

このイエス様の言動を教会ではいつも、そしてこれからもお話ししてまいりますので、そのことについての詳細は今日は話しません。しかし、まさしく私達人間はこのお方のうちに私達の生きる道と希望を見つけることが出来るのです。明ら

かにこの人の生きざまはノアの洪水の時代の人やバベルの人たちとは異なるのです。

時々、私達は「人を見ないで、イエス様を見上げましょうよ」という言葉を聞きます。それは何かクリスチャンの言い訳となるような言葉としても聞こえます。しかし、実際のところ、この言葉は正しいことを言っているのです。人間とはすなわち私達が今日、見てきた者達のことであり、イエス・キリストとはそんな人間とはまったく異なる、父なる神との関係を完全に保っている唯一のお方なのですから。

牧師として言うのは何ですが、人は人である限り、そこに完全な期待を寄せることはできません。しかし、このイエス・キリストは別なのです。いかがですか、あなたはこれから何により頼んで、何を見上げて生きていきますか。もう、人間はこりごりという方がいるかもしれません。もう、誰も信用できないという方、いるかもしれません。おっしゃることはごもっともです。人はそのような者であり、これからも私達を悩ます人間が私達の前に立ちはだかるでしょう。否、私達自身がそんな人間なのかもしれません。しかし、イエス・キリストは違います。このお方のことをもっともっと知ろうではありませんか。そこから溢れんばかりの神の恵みと愛と知恵と力が溢れ出てきます。私達の心が疲れてしまう時、折れかけてしまうような時、私達は自らに向かってこう語りかけ、顔をあげようではありませんか。「この人を見よ！」と。お祈りしましょう。